

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00510

研究課題名(和文) 敬語の丁寧語化における歴史社会言語学的分析

研究課題名(英文) Historical Sociolinguistic analysis of Politeness in Japanese language

研究代表者

田辺 和子 (TANABE, Kazuko)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：60188357

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、丁寧体「です」の簡略体である「っす」の使用の拡大状況をアンケート及びインターネットから考察した。その結果、20代男性は、「形容詞+っす」、「名詞+っす」のみならず、「動詞+っす」という非文法形にも、受容度が高いことが判明した。この「動詞+っす」の使用が拡大傾向にあるということは、動詞の連用形に接続する丁寧体「ます」の衰退を意味することである。若い女性においては、「行くです」という「動詞+です」使用がインターネット等でみられる。これは、先輩に親しみを表す表現として使われる場合があることを示唆している。このように、日本語の変化の兆候として、「です」への統一「ます」の消滅が推察できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、長期的視野に立って日本語の変化を社会言語学的観点から考察することを目的とする。言語変化から社会の変化を理解し、日本の未来像を考える貴重な材料となる。言語変化の大きな特徴としては、言語的合理性の追求が挙げられる。より無駄のないように、言葉の言語形態が整えられていく過程が考察できる。このような通時的言語研究は、共時的言語研究では得られない、言語の本質を探究できる学術的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：This study examined the expanded use of the simplified form '-ssu' of the polite form of 'desu' from questionnaires and the internet. The results showed that men in their 20s were highly receptive to the ungrammatical form 'verb+ssu'(eg. iku-ssu(to go), (taberu-ssu(to eat)) as well as 'adjective +ssu'(eg. ii-ssu(to be good), yasui-ssu(to be cheap)), 'noun+ssu'(eg. gakusei-ssu (to be a student), ninjin-ssu(to be a carrot)) which are grammatically correct. The growing use of 'verb+ssu' indicates the decline of the polite form 'masu', which is to be connected to a verb conjugated form. Among women in their 20s, the use of 'verb+desu' can be seen on the internet and elsewhere. This is a case of trying to express familiarity and closeness towards one's seniors' 'senpai'. Thus, the transfer from 'masu' to 'desu' could be inferred as a sign of change in the Japanese language.

研究分野：社会言語学

キーワード：丁寧体 「です」「ます」 対者敬語

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の背景は、戦後 75 年あまりを経て民主化が進んだ日本社会において、敬語が丁寧語化しつつあることを、歴史社会言語学的見地から分析しようとするものである。日本の待遇表現は、15 世紀以来、階層社会を基盤として発展してきたが、近年の脱階層化 (un-stratification) の進行により、話し手の聞き手への配慮に重点がおかれた「対者敬語」化が進んでいる。この「対者敬語」化というのは、聞き手の年齢・身分・地位などの属性の上下によって言葉を使い分けるのではなく、話し手の聞き手への配慮によって、丁寧な言い方をする言語行為である。

本研究では、特に、「新敬語」と認知されている文末につく「っす」表現を取り上げる。倉持 (2009) によると、「っす」は、1960 年代に大学の運動部において頻繁に使われる世になり、1966 年には、漫画の「フジ三太郎」の中で使われたことが、マスコミで取り上げられた最初だそう。1967 年には、テレビアニメの「サザエさん」で認識され、1970 年代のテレビドラマでは、「そっすね」「いいっすね」を頻繁に耳にするようになった。1980 年代には、北海道の高校生が日常生活において使い始めたと言われている。

国語史を遡ると、丁寧語としての「です」「ます」の現代語使用の形は、明治初期に形作られ、明治 21 年 (1887) に出版された Aston による文法書 *A grammar of the Japanese spoken language* にその記述がみられる。以後、20 世紀の間は、この両者が接続する品詞によって(「です」は、形容詞と名詞、「ます」は動詞)使い分けられてきた。

「です」の起源を遡ると、江戸時代後期 (1800 年代中期) の「でござります」が「でござります」にかわり、やがては「です」が成立したと解説している記述がある (開成学館教師ガラタマによる「英欄会話譯語」(中村 (1948, p.99))。明治初期には、「です」は、「遊里語」として記載されている場合が多い。しかし、江戸時代から明治時代への移行は、中世の封建的社会から近代国家への社会変化であり、階級・性差を超えた言語の平等化として、一般人の用いる丁寧語として浸透していったのである。

一方、「ます」は、元々「まいらす」(15 世紀以前から)「まいらする」「まらする」「まっする」「まっす」「ます」と転じたもので、他の変異体の一つとされる「まする」は、雅俗文法便覧 (1878 年) などに記載はあるが、口語体としての記述は、わずかである (中村、同上)。

近年、中村桃子氏が『新敬語「マジヤバイっす」社会言語学の視点から』(2020) において「っす」の用法を、広くテレビドラマ番組などを対象に使用例を集め分析している。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、言語の民主化が、「身分の上下」の使用の基軸にした敬語を、「聞き手への配慮」を基盤とする丁寧語にする過程を歴史社会言語学的見地から分析しようとするものである。日本の待遇表現は、15 世紀以来、階層社会を基盤として発展してきたが、近年の脱階層化 (un-stratification) の進行により、話し手の聞き手への配慮に重点がおかれた「対者敬語」としての「丁寧語化」が進んでいる。具体的トピックとしては、丁寧語の助動詞「ます」が衰退し、「です」「っす」が進出している言語現象を取り上げ、この丁寧語移行のプロセスを文法的・語彙的・語用論的観点から包括的に検証する。また、丁寧語の創生と衰退を、中古・中世時代の日本語の変化とも重ね合わせ、敬語の変化を歴史社会言語学の支援で捉え直すことが本研究のねらいである。

本研究は、丁寧語の「ます」が衰退し、「です」「っす」にどのような取って代わられているか、構文的見地を意味論の見地からその進行度合いを検証することをねらいとしている。

「ます」の停滞・消滅は、徐々に進むと推察する根拠として、従来、「～します」動詞として使われていた二語漢語 (例:「感謝します」「感動します」「配達します」等) が、SNS 上で「漢語名詞+です」として使われている例をよく見る (例「感謝です」「感動です」「感激です」「配達です」)。「～します」より「～です」の方が字数が一字分減るといった経済性も相まってのこともあるが、最近の言語変化研究では、SNS 使用などメディアの影響を考える必要が出てきている。

研究方法の研究も、本研究の目的のひとつである。21 世紀は、「研究方法」の研究開発の時代だという研究者もいる。本研究では、質的・量的分析の併用を試みる混合研究方法を採用している。混合研究方法では、質的と量的研究方法のそれぞれの欠点を補完し合うことができる。質的研究方法は、どんなに大量のデータを駆使しても、対象物の物理的動きしか把握できない。社会言語学においては、一人一人の価値や規範など心の中を読むことが必要である。その点質的分析は、人の価値観から、言語行動の要因を分析できる。本研究は、混合研究方法の実践とその検証研究でもある。

### 3. 研究の方法

#### (1) アンケートによる調査

2021年20代～50代までの男女500人(62～63人ずつ8グループ)を対象としたアンケート調査をした。テーマは、新たな丁寧語といえる「動詞+っす/です」、受け身形や尊敬語の助動詞を含むそれぞれの動詞の形式において、自分でも使うのか、使わないのかその程度を尋ねた。

#### アンケート質問例

##### Q1 動詞の過去形+「っす」

横田：「おととい、神楽坂にいったんだって？」

吉田：「ええ、坂の途中の店で焼き鳥を食べたっすよ。」

(しばしば使う /時々使う /ほとんど使わない /全然使わない)

##### Q2 動詞の受身形+「っす」

警官：「どうしましたか。」

中村：「きのう、駅の駐輪場で自転車を盗まれたっす。」

(しばしば使う /時々使う /ほとんど使わない /全然使わない)

##### Q3 動詞の現在形+「です」

ともこ：「洋子さん、明日の日曜日どうするの？」

洋子：「キャンプに行くです」

(しばしば使う /時々使う /ほとんど使わない /全然使わない)

統計の分析方法としては、二元配置分散分析 (Two way analysis of variance) を使った。すなわち、性別と年齢の相互作用が統計学的に反映されているかということの判別を試みた。その結果、「っす」「です」の使用においては、年齢と性別の相互関与は認められ、20代～40代の男性は、女性全年齢層と比較して、「使う」と答えた割合が高かった。男性間では、20代が50代に比較して、使用度が高いことが証明された。

「動詞+です」に関しては、20代男性と女性の対立度が、他の世代や性別と比べて際立って高い結果を示した。すなわち、男性は、高い使用率を示したが、女性は、不使用の態度を他の女性年齢層よりも明確に表明した。

#### (2) インターネットによる調査

インターネット Web site Yahoo!トレンドを利用し、「動詞+っす」「動詞+です」の twitter 上の使用例を月ごとに調べ、その変化を考察した。

やる	yarimasu	-ssu	比率	- desu	比率	- masita	tassu	比率	tadesu
2021.6	16042	17	0.105%	61	0.378%	4405	10	0.226%	2
	27849	28	0.100%	119	0.425%	8195	17	0.207%	19
	29352	29	0.098%	123	0.417%	8266	27	0.325%	20
	24072	32	0.132%	119	0.419%	6768	22	0.323%	11

その結果、A.「やる」のように「やるです」のほうが「やるっす」よりも数が多い動詞群と、B.「行く」のように「行くっす」のほうが数が多い動詞群、の2種類があることが判明した。これは、その動詞が使われる場面と使用する人物との関係で、一概に口語形「っす」形が先行して使用されているとは述べられないということの意味する。

「た形」接続においても同様で、全体的に数は少ないものの、比較的「っす」にも「です」にも接続する動詞群と、どちらかに使用が偏る動詞群とあることが認められた。

行く	ikimasu	-ssu	比率	-desu	比率	-masita	tassu	比率	tadesu
2021.1	34962	54	0.154%	27	0.077%	7683	2	0.025%	7
	36081	58	0.160%	28	0.077%	7919	4	0.050%	14
	41203	64	0.155%	39	0.094%	9255	4	0.043%	13
	43368	57	0.142%	50	0.124%	9075	4	0.044%	9

#### 4. 研究成果

本研究は、丁寧語の助動詞「ます」が衰退し、「です」「っす」がどのように使用を拡張していくか、構文的見地と意味論的見地から、その進行度合いを検証することをねらいとしてきた。2021年度は、「っす」の使用実態を調査する目的で、インターネット上で、動詞の時制およびアスペクト別に「っす」使用の受容度を測った結果、時制においては、現在形（例「行くっす」）と過去形（例「行ったっす」）に関しては、動詞によって進行度が異なることが判明した。そして、「っす」の使用率は、動詞の一般的な使用頻度順位とは異なった。

現在形が先行して「っす」の使用件数が多い動詞群（例：「考えるっす」「できるっす」）と、過去形使用の方が多く動詞群（例：「聞いたっす」「出たっす」）があることが判明した。

アスペクト別では、多くの動詞に共通して「変わるっす（辞書形+っす）」の方が、「変わっているっす（ている形+っす）」よりも使用頻度が高いことが確認できた。

場面別では、大学や職場の先輩格の人物に、尊敬とともに、親近感を表現するときに頻繁に使用されることが、テレビドラマなどの考察から判明した。

アンケートの結果から、世代別「っす」表現の受容度では、20代男性が一番高く、非文法形さえ半数近くの方が自分でも使うという回答をした。これに対し、同じ男性でも30代・40代・50代は、「行くです」の非文法形には、抵抗感を示した。女性は、全般的に「っす」使用に関しては、どの世代も、「耳にはするが、自分は使わない」という回答が多かったが、インターネットによる調査では、「動詞+です」という「っす」という簡略形でなく「です」を使った「行くです」の使用が女性が書いたとみられるSNSの文章に発見された。

さらなる分析が必要なテーマとしては、「地域別特徴」の把握である。「っす」の使用頻度割合を東京・大阪・栃木・東北3県という区分で、調査したが、栃木の使用割合の方が、東北3県はもとより大阪よりも、高く、「食べるっす」「行くっす」においては、東京よりもわずかに上回る使用頻度を示した。将来的に、地域区分の仕方を再検討し、個々の地域に十分な対象件数を当てられる規模の調査を実施し、全国的な「っす」進行の実態を把握することは、現代日本の待遇性の変化を理解するのに重要なデータとなるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kazuko Tanabe	4. 巻 1
2. 論文標題 On the use of de+irassharu and de+orareru in Spoken Japanese	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Practicing Japan.35 Years of Japanese Studies in Poznan and Krakow	6. 最初と最後の頁 147-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.48226/978-83-67287-73-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 田邊和子・小池恵子	4. 巻 61
2. 論文標題 「～でいらっしゃる/おられる」の使用における混合研究法による分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国文目白	6. 最初と最後の頁 26 - 40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田邊和子	4. 巻 71
2. 論文標題 An Attempt to Observe Changes in Speech by Utilizing the Yahoo Search Engine	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 33-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Kazuko Tanabe
2. 発表標題 Diversification and leveling in the end of sentence expression -ssu as a new honorific in Japanese
3. 学会等名 International Pragmatics Association（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kazuko Tanabe
2. 発表標題 The Observation of the change of the politeness form in Japanese
3. 学会等名 Sociolinguistics symposium 24 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazuko Tanabe
2. 発表標題 新敬語「っす」にみられる多様化と平準化
3. 学会等名 第19回 国際都市言語学会 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田邊和子
2. 発表標題 リレー作文から考察する日本語の特徴：日本語上級学習者と日本語母語話者の協働作業の例から
3. 学会等名 American Association of Teachers of Japanese (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazuko Tanabe
2. 発表標題 The simplification of Honorific Language in Japanese in the globalized age
3. 学会等名 17th International Pragmatic conference 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kazuko Tanabe
2. 発表標題 Mutual learning between Japanese native speakers and second learners through collaborative writing
3. 学会等名 World Congress of Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kazuko Tanabe
2. 発表標題 「名詞+でいらっしゃる・おられる」の使用実態調査と分析
3. 学会等名 Practicing Japan-35 years of Japanese Studies in Poznan and Krakow (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 井上 史雄、田邊 和子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 社会言語学の枠組み	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井上 史雄  (INOUE Fumio)  (40011332)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授    (12603)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	柳村 裕  (YANAGIMURA Hiroshi)  (50748275)	国際医療福祉大学・国際交流センター・助教    (32206)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関